

Grammar Instruction in Mock Classes —In a Class on English Teaching Methodology—

OKAMOTO Yoshikazu[†]

Abstract

In the English teaching methodology class, students are supposed to give a mock class. Grammar instruction is included in each mock class. One issue is how to teach grammar in accordance with the Courses of Study. In this paper, first, how to teach grammar in accordance with the Courses of Study is explained. Then, a mock class that we conducted is introduced, and the grammar instruction that was provided by the students in the mock class is discussed. Finally, an ideal and effective grammar instruction is proposed.

Keywords

English Teaching Methodology, grammar instruction, the Courses of Study, mock classes

模擬授業における文法事項の指導 —英語科教育法の授業にて—

岡本 芳和[†]

キーワード

英語科教育法, 文法指導, 学習指導要領, 模擬授業

1. はじめに

英語科教育法の授業の中に「模擬授業」という授業回を設けている。教育実習に行った時に、学生⁽¹⁾は実際に授業を数回行うことが想定されている。この実習期間に、ある程度完成された授業を生徒の前で行わなければならない。そのための訓練として、模擬授業を行わせている。各回の模擬授業の中に文法事項の指導

を取り入れている。文法とは何であろうか。それは、単語だけでは伝わらない言語の特定の意味と形式を関連づける知識のことをいう (Ur (2009))。したがって、コミュニケーションにおいて、メッセージの送受信には文法の知識は必要になってくる。そして、学習指導要領に合わせて、どのようにこの文法指導というものを行なっていけばよいのかが一つの課題となる。

[†] yokamoto@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

そこで、本稿ではまず学習指導要領に沿ったその文法事項の指導について説明をする。次に、授業で行った模擬授業を紹介し、模擬授業の中で履修学生が行った文法事項の指導について考察をする。最後に、どのような文法事項の指導が効果的であるのかについて、理想とする案を提案してみたい。

2. 背景

まず、本稿での議論のきっかけとなった背景について説明する。よく知られているように、近年の日本の英語教育では、コミュニケーション能力の育成が重視されていることは言うまでもない。『高等学校 学習指導要領（平成30年告示）』の第13節、第1款 目標では、それは次のように記されている。

(1) 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。
（『高等学校 学習指導要領（平成30年告示）』、第13節、第1款、p. 460）

次に、英語の授業について説明する。「英語の授業は基本的に英語で行う」という方針をよく聞くことがある。これについては『高等学校 学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』では、次のように記されている。

(2) 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。

（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』、第2章、第1節5「言語活動」、p. 20）

もちろん、中学校の学習指導要領の中にも同様のことは盛り込まれている。

以上の2点から本稿の背景としては、コミュニケーションを重視した教育の中で文法指導をどのように扱うのか、また、原則英語で授業を行う中で文法をどのように教授するのかの2点が挙げられる。

3. 学習指導要領における文法事項について

「文法はコミュニケーション能力の育成には必要ない」と言う人もいる。また、「文法の力はコミュニケーションを行うには絶対必要だ」と言う人もいる。これら2つの相反する意見がある中で、本稿では、英語力を向上させるには文法事項を学習することは必要であると言う立場で、議論を進めていく。現学習指導要領では、4技能5領域⁽²⁾に及ぶ言語活動を通して、学習者の英語能力を向上させることを目標としている。この5領域の中には「文法」というものはない。学習者の英語コミュニケーション能力を養成する中で、学習指導要領では、どのように文法事項を扱っているのだろうか。次の2つの説明を見てみよう。(3)は中学校学習指導要領に、(4)は高等学校学習指導要領に見られる文法事項に関する記述である。

(3) 文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させた上でその知識を活用させたり、繰り返し使用することで当該文法事項の規則性や構造などについて気付きを促したりするなど、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。

（『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説

外国語編 英語編』, 第2章, 第3節(2), p.93)

(4) 文法事項の指導に当たっては, 文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ, 過度に文法的な正しさのみを強調したり, 用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し, 使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど, 実際のコミュニケーションにおいて活用できるように, 効果的な指導を工夫すること。

(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説外国語編 英語編』, 第3章, 第2節, pp.132-133)

(3)については, 文法事項をコミュニケーションが行われる状況や場面を想定し, それと関連させながら, 文法事項を教授することが求められている。そして, 知識の活用や繰り返しの練習などを通して, その規則性や文の構造について学習者の気付きを促進させる指導が求められている。また, 教員による一方的な説明だけでは不適切であることも理解できる。(4)についても同様の指導が必要であることも推察できる。

4. 文法指導の難しさ

学習指導要領が改訂されるたびに, 英語教育の方針や授業の方法も大なり小なり変化をしていることは明らかである。実際に筆者が中学生・高校生だった頃の英語の授業, 筆者が高校の英語教員であった頃の英語の授業, そして, 現学習指導要領の中で行われている英語の授業, それぞれ多少変化は見られる。第2節と第3節で説明したことに基づき, 現環境における文法指導の難しさを考えると, 次のことが挙げられる。

(5) 現環境における文法指導の難しさ

- ① 文法事項を英語で教えること
- ② 文法用語を英語で教える必要性の有無
- ③ 英語コミュニケーションに役立つ内容であること
- ④ 実際の使用する場面を意識した内容の教授であること

以上をふまえた上で, 英語科教育法の授業の中で, 学生に模擬授業の中でどのように文法指導を行うべきかを指導することは容易ではない。また, 現実問題として, 生徒の大半は英語を理解するのに精一杯で, 文法事項という複雑な内容までを英語で理解することは, 生徒にとってより困難な学習環境を作ってしまうことにつながるかもしれない。

5. 模擬授業

本節では, 英語科教育法の授業で実践している模擬授業の内容について説明してみたい。毎年, 各学期ごとに, その内容に改善すべきところがあれば, 毎回それを改善して, 学生に模擬授業の要項を提示をしている。学生はそれを確認をし, 模擬授業の準備をする。

5.1. 模擬授業の構成

最初に, 2022年前期の英語科教育法Ⅱの授業で行った模擬授業の構成を紹介する。使用したテキストは数研出版の*BLUE MARBLE English Communication 1*で, 対象は高校1年生である。そして, 模擬授業の構成は次のようになっている。

(6) 模擬授業の構成

- ① 挨拶→スモールトーク
- ② オーラルイントロダクション
- ③ 音読活動
- ④ 内容理解のQ&A(答え合わせまで)
- ⑤ Key Language

ここで模擬授業の流れを簡単に説明する。今回の模擬授業は上記の①から⑤で構成されており、一人当たりの持ち時間は20分⁽³⁾で、これら5つを全て取り入れることになっている。前提として、授業は基本英語で行い、指示等は必ず英語で行うようにルールを定めている。①の挨拶、スモールトークから始まり、②のオーラルイントロダクションに入る。ここでは、当該模擬授業で扱う本文の内容を英語で説明をし、教員と生徒のインタラクションを取り入れている。そして、③の当該partの音読活動に入り、④の内容理解を行う。最後に、⑤のKey Languageを説明する。このKey Languageのところ当該partの新出文法事項が掲載されており、その説明等を工夫して行う。

本稿では、文法指導について取り上げているため、⑤について議論を深めていく。2022年前期においては8名の学生が模擬授業を行った。今回の模擬授業では、文法指導の方法については特に指定しなかった。その方法について特別な事前指導を行なったわけではないが、上手にそれに対応した学生が多かった。その理由としては、2021年度後期から始まった英語科教育法の授業の中での様々なことを学習し、それを実践に結びつけたからであると考えられる。

5.2. 学生による文法指導の実践

ここでは、実際に学生が模擬授業の中で行った文法指導がどのようなものであったかを報告する。今回は3週に渡り、模擬授業を行った。今回ターゲットとなった文法事項は以下の通りである。

(7) 文法事項

第1週目：see + O + doing

第2週目：see + O + done

第3週目：S + V + O + if

第1週目を学生A, B, Cが、第2週目を学生D, E, Fが、第3週目を学生G, Hが担当した。また、今回の検証のために、学生に許可を得て、模擬授業の録画をさせてもらった⁽⁴⁾。それを再度見直して、そのまとめを報告をする。

この検証結果を表にまとめてみたいが、予め表にある評価項目を説明する。

(8) 表にある評価項目の説明

①「日本語」：指導において、日本語を使用していたかどうかを表す。

②「文法用語」：指導において、文法用語を使用していたかどうかを表す。

③「場面」：指導において、ある場面を意識した指導になっているかどうかを表す。

④「練習」：指導において、練習が行われていたかどうかを表す。

⑤「理解」：指導において、文法事項の理解を確かめるインタラクションがあったかどうかを表す。

以下に結果をまとめた表を示す。各評価項目において該当する場合に○をつけている。

表1：模擬授業における文法指導

| | 日本語 | 文法用語 | 場面 | 練習 | 理解 |
|-----|-----|------|----|----|----|
| 学生A | | ○ | | ○ | ○ |
| 学生B | | | ○ | ○ | ○ |
| 学生C | | ○ | ○ | ○ | |
| 学生D | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 学生E | | ○ | | ○ | ○ |
| 学生F | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 学生G | | ○ | | ○ | ○ |
| 学生H | ○ | ○ | | ○ | ○ |

該当する○の数が多かった3つの項目（文法用語、練習、理解）について説明してみたい。まず、「文法用語」については、学生Bを除く全員が英語で、あるいは、日本語で文法用語を

用いて当該文法事項を教授していた⁽⁵⁾。これについては文法用語をそのまま用いた説明の方がスムーズになるということが考えられる。但し、英語で文法用語を教える場合は学習者の高い英語力と理解力がなければ、スムーズに全てを理解させることは難しいように思える。例えば、指導の中で「知覚動詞」を *perception verb* と言っても、それがわからなければ、生徒はスムーズに理解はできないということである。

次に、「練習」と「理解」については全員がこれらの項目を指導の中に取り入れていると言える（学生Cについては文法事項を理解しているかどうかの確認作業中に時間切れとなってしまったため、○は付けなかった）。学生は各自ハンドアウトに各文法事項を扱った文をいくつか用意し、それを考えさせ、理解できているかどうかの確認作業を取り入れている。

ここからは、○の数が少ない項目について説明する。まず、「日本語」の項目について議論をしてみたい。指導において日本語を使用したかどうかの判断が難しいシーンもあったが、ターゲットの文法事項をほぼ全て日本語で説明したのは学生H、ただ1人であった。なぜ判断が難しいかということ、結局のところ、ターゲットの文法事項の意味を確認をする際には全員が日本語でその意味を補っていたからである。例えば、“The meaning of this phrase is Oが～しているのを見る。”という教員役の説明のセリフに見られるように、このような日本語の使用は自然であるように思える。この場合は、日本語を用いたからといって、日本語で教えているという印象は受けなかったため、○は付けなかった。また、学生全員がターゲットの文法事項の意味を日本語で確認をしていたが、この指導は英語の教授においては否定的な側面ではないと判断する。

最後に、「場面」の項目について説明する。何人かの学生が「場面」を意識した指導を心がけていた。例えば、ある学生はハンドアウトの

中にターゲットとなる文法事項に関連したイラストを用意し、それをその文法事項を使って、表現することができるかどうかを実践した。実際に学生がハンドアウトの中で使用した例（第2週目の *see + O + done* の例）を紹介してみたい⁽⁶⁾。

(9) 場面を意識した例

Q: Why is she so angry?

A: Because she saw _____ by her brother.



イラストを提示することによって、生徒に場面を意識させることができる。そして、生徒はその状況を理解し、適切にターゲットの文法事項を使用できるかどうかを確認できる。また、例がQ&Aの対話方式になっているので、実際のコミュニケーションの場面も想像しやすいことが考えられる。

また、ターゲットの文法事項と、それと対比する既習の文法事項を並べ、違いを考えさせ、状況をイメージさせ、意味を理解していく指導方法をとった学生もいた。次の例は第1週目のターゲットとなる文法事項に関するものである⁽⁷⁾。

(10) 2つの例文を並べる場合

a. I saw a man walk across the street.

b. I saw a man walking across the street.

(10a) が既習の文法事項の例で、(10b) が今回のターゲットとなる例である。この「場面」の項目では、表1の結果からわかるように、全員が実践できていなかったことは事実であるため、次の学期で行われる模擬授業では「場面」を意識した指導方法ができるように改善してい

きたい。

6. 理想の文法指導について

文法指導については、これまでにいくつかのアプローチが存在してきた、そして、今も存在していることは理解している⁽⁸⁾。日本の英語教育を考えた上で、また、現学習指導要領に書かれていることを考慮した上で、英語科教育法の授業の中ではこれについてどのように学生に指導していけばよいのだろうか。本節では、理想とする文法指導について考えてみたい。

6.1. 理論的考察

まず、文法について簡単な理論的な考察を試みたい。英単語をたくさん知っているだけではコミュニケーションはできない。また、知っている英単語を適当に並べても相手にはメッセージは伝わらない。メッセージとは文からなり、その文を作るためには文法的な知識が必要となる。また、様々な文の構造や文の表現を習得するためにも、それは必要であることは自明の理である。

文法力とは知識の集まりであると言っても過言ではない。それは知識があればあるほど、表現は豊かになり、使用できる文の構造が増えるからである。それゆえ、文法力と知識というものは密接に関係しているといえる。そこで、言語習得や言語学習において、知識というものはどのように捉えられているのだろうか。英語教育学や認知心理学の分野では、2種類の知識、すなわち、宣言的知識 (declarative knowledge) と手続き知識 (procedural knowledge) があると説明されている。もう少しわかりやすく言うと、次のようになる。

(11) 文法に関する知識

- a. 文法について説明できる知識 (宣言的知識)
- b. 文法を実際に運用できる知識 (手続き的知識)

文法指導においては、これら2つの知識が必要になる。なぜならば、片方だけの知識だけでは役に立たないからである。実際に運用できないということになるとコミュニケーションには繋がらないということの意味するのである。

次に、これら2つの知識をどのように指導に取り入れればよいかについて説明する。言語習得や言語学習における知識の定着には「文法について説明できる知識→文法を実際に運用できる知識」への流れが重要になる。例えば、授業で教授する新出の文法事項を教えることが(11a)の知識に関係する。最初にこれを学習者に理解させることが必要になる。この知識だけでは運用にはつながらないので、(11b)の知識が定着できるように授業の中では練習を繰り返し行い、いわゆる文法学習における「気付き」の機会を数多く増やしていくことになる。このようなプロセスを経て、文法の知識は定着すると考えられる。もちろん、1回の指導だけでは身につかない場合もある。それについては繰り返し繰り返しの教授や指導が必要になる。特に、後者の知識については長期的視点でその定着を見ていかなければならないこともあり得る。

6.2. 文法指導の方法

ここでは、これまでのディスカッションと第4節の(5)で指摘した課題とを考慮しながら、文法指導において必要なことを踏まえながら、その方法を提案してみたい。

6.2.1. 教授言語について

現学習指導要領にあるように、英語の授業は原則英語で行うとするポリシーから、英語の授業全体は英語で行なっているため、文法事項の指導だけ日本語で行うというのはかなり不自然である。したがって、文法指導においても教員が使用する言語は英語でよい。ただし、ターゲットの文法事項の意味を確認する場合はその

表現の訳や解釈を日本語で提示することは許されると思う。例えば、次のような板書は生徒にとっても見てすぐわかると思われるので効果的である。

(12) “S + V + O + if” の例

【板書】

ask + O (人) + if ~ 「人に~かどうか尋ねる」

教員がこの構文の意味を確認するために、「人に~かどうか尋ねる」と指導において日本語を発しても問題はない。

6.2.2. 文法用語

文法指導に文法用語を用いるかどうかについては賛否両論があると思われる。文法用語を用いなくても指導はできると主張する人もいるからである。しかしながら、文法用語を指導に取り入れることは、生徒の理解をスムーズにすることができると思われるので、文法用語を使用することは悪くはないと考える。ただし、必要最低限の使用に留め、複雑な用語は用いないことがその使用の条件となる。また、中学校での授業と高等学校での授業では文法用語の取り扱いには、十分な注意が必要である。中学校では学習内容が少ないため、使用できる文法用語も限られているからである。

6.2.3. 指導内容

説明の前に確認しておきたいことは、第4節でも説明したように、文法はコミュニケーションに役立つものでなければならないということである。

文法事項に関する指導内容については、文科省によって使用を許可された検定教科書に従って授業を行えば大きな問題は起こらない。学習指導要領に基づいて作成されている教科書であることが前提となっているので、必要以上に複雑な文法事項や、ほとんど使用頻度がないよう

な文法事項は含まれていない。しかし、検定教科書等以外の教材を授業で扱う場合は注意が必要である。これが意味することは、学習者の英語の習熟度によっても扱う文法事項は様々であるが、時に使用頻度がほとんど見られないような文法事項もあるかもしれない。これはコミュニケーションにはほとんど役に立たないこともあるので、その点を教員は考慮しなければならない。

6.2.4. 指導の流れ

第5節で説明したように、文法の指導には知識の定着が必要である。このためには、(11a) から (11b) への知識の定着の流れが必要である。したがって、この流れを指導に組み込むことを優先してみたい。そのほか指導に必要なことは、生徒に「気付き」を与える機会を取り入れること、場面を設定した指導を取り入れること、十分な練習を取り入れることと考え、次のような流れを提案したい。

(13) 理想とする指導の流れ

- ① ターゲットの確認
- ② 場面の提示+例文の使用
- ③ ターゲットの意味・用法の確認
- ④ 練習問題+答え合わせ
- ⑤ 活動



まず、教科書の例や教科書に出てくる本文の例を用いて、ターゲットとなる文法事項の確認をする。ターゲットの表現に赤等で下線を入れ、目立つように示す。次に、ある場面を提示し、簡単な英文を示し、説明をする。そして、そのターゲットがどのような意味になるのかを考えさせる。第3に、ターゲットの意味や用法について教員が中心となって説明をし、正しい知識を生徒に植え付ける。第2と第3のプロセスの中で、生徒に「気付き」の機会を与える余裕を作る。第4に、ターゲットの文法事

項に関する練習問題を用意し、生徒がターゲットを理解できているかどうか、その知識が正しく定着しているかの確認をする。最後に、ターゲットを扱った言語活動を用意し、運用できるかどうかを確認する。

上述した指導の流れは理想であり、実際の現場ではこれを50分の授業の中の一部ですすめなければならない。そうになると、教員の授業の構成力や指導力ももっと必要になることが予想される。教員は授業の準備も大変な作業とはなるが、効果的な英語学習法を常に意識はしなければならないだろう。

7. まとめ

本稿では模擬授業における文法の指導に焦点を当て、その指導における問題点やその指導方法について多くのことを議論した。現学習指導要領を土台とした最適な文法指導とは何か。この問いに対して、筆者自身も英語科教育法の授業を通して多くのことを学ぶことができた。

場面を意識させ、文法事項を教授するということは非常に重要なことである。それは我々は日常生活の中で常に言葉を発しているからである。単なる一方向的に文法を教授するだけで

は、暗記だけで文法の学習が終わってしまう。そして、実際にどのようにそれを使用・運用すればよいか生徒はわからない。日本の言語環境を考えると、生徒は英語を使用する場面は授業以外ではほとんどない。だからこそ、ターゲットとなる文法事項が使用される場面や状況を想起させることは必要となる。

そして、言語習得や言語学習には、その過程で生徒の「気付き」というものも重要になってくる。彼らの「気付き」が起こり、それを正しい知識として習得できた時に、能力は向上していく。「生徒の思考→気付き→理解」というプロセスが、その後の言語活動の中で発展していくような授業方法を教員がいかにバランスよく取り入れればよいか。これが教員の腕の見せ所であろう。

最後に、文法の力とはコミュニケーションで使用する英語力を支える柱の一つと考えることができる。この文法の力が各技能と結びつき、生徒の学習を促進させることを期待したい。そして、英語教職課程を履修している学生にはよりよい学習法とは何かを共に追求できる教員になってもらいたいと考えている。

注

- (1) 本稿では、「学生」と「生徒」は同義ではない。前者は大学で英語科教科法を履修している学生を表し、後者は中学校・高等学校で英語を学習する生徒を表す。
- (2) 4技能5領域とは、「読むこと」、「聞くこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」を表している。
- (3) 実際の授業時間は50分、もしくは、45分であるが、それを凝縮した形で行うように指示を出している。時間の都合により、活動などを短縮する場合があるが、それは模擬授業参加者（＝生徒役）の間では暗黙の了解で、進行に協力するように指導している。
- (4) 録画の視聴を希望する学生については自分の模擬授業が録画されている動画を与え、各自の反省と今後の改善に努めてもらった。
- (5) 学生Bは文法用語は使わずに、ターゲットとなる表現“see + O + doing”をそのまま発していた。
- (6) (9)の例は金沢星稜大学人文学部3年生石黒智也さんがハンドアウトで使用した例とイラストである。見やすいように一部加筆と修正を加えた。
- (7) (10)の例は金沢星稜大学人文学部3年生松村球太郎さんが板書した例文である。説明の都合上順番は並べかえた。
- (8) 文法指導の方法は大きく4種類（形式偏重型、形式重視型、意味偏重型、意味重視型）に分類される（望月（編）（2018³：230-239））。本節ではそれぞれの詳しい説明は避け、種類の紹介だけに留めておく。

引用（または参考）文献

- Brown, D. (2007) *Principles of language learning and teaching*. New York: Pearson Education.
- 望月明彦（編）(2018³)『新学習指導要領にもとづく英語科教育法 第3版』大修館書店
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説：外国語編』
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領』
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説：外国語編』
- 鳥飼玖美子（2014）『英語教育論争から考える』みすず書房
- 鳥飼玖美子（2017）「英語の授業は基本的に英語で行う」方針について『学術の動向』第22巻11号, 78-82
- Ur, P. (2009) *Grammar practice activities: A practical guide for teachers* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

